

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

家族と愛の研究

Family and Love Studies

2. 研究代表者氏名

富山一郎

TOMIYAMA Ichiro

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(1年目)

4. 研究目的

コロナ禍での外出自粛により、夫婦間・親子間の不和・虐待や、一人親家庭の経済的困窮があらためて浮き彫りになったように、今日、「一对の親が子どもを献身的に養育する家庭」すなわち「核家族」を標準として行われる政策や事業は、多くの齟齬や歪みを生じさせている。女性の社会進出や、人々の性的指向の多様化、さらには人工的生殖の増加に伴い、家族の「形」は著しい変化を被りつつあるにもかかわらず、我が国の政策や立法が想定する家族の「イメージ」のほうは、「異性どうしの両親と子ども」という旧来のスタンダードに固執しつづけているのである。家族の実情とイメージのあいだのこうしたギャップは、たとえば夫婦別姓の法制化や、民法の嫡出推定規定の緩和をめぐる議論を停滞させ、ひいては、少子化や非婚化といった社会問題の遠因ともなっている。

本研究班は、「家族」をとりまく法的、制度的、歴史的、社会文化的、医学的、思想的文脈を横断しつつ、また、他の国々や文化の実情に照らした比較研究を忘れることなく、このギャップを埋めるための新たな超域的パラダイムの確立を目指す。その際、本研究班では、その特色となりうるひとつの問題系をアプローチの導線に据える。「愛」(夫婦愛、家族愛、親子愛——とりわけ子の親にたいする愛)の問題系である。愛を媒介としてセクシュアリティと生殖および次世代育成を一体化させる「核家族」=「愛の共同体」という価値観は、それを生み出し、それによって支えられることを望んだ西欧近代の社会構造や生産様式の変貌とともに、その実質的な役割を終えたようにみえる。にもかかわらず、それは夫婦別姓反対派の唱える「家族の絆」のような道徳的価値に姿を変えて、今日も生き存えている。その原動力は何であり、いかなる言説装置がそれを支えているのだろうか。これらの問題の解明は、件のギャップの解消を妨げる知的制止を解くことに資するものと思われる。

Conflicts among family members, spousal and child abuse, poverty among single-parent households: these are all familiar family problems, but have been aggravated by the Covid-19 pandemic. Yet, we have not freed ourselves from the ideal of nuclear family, a group consisted of a heterosexual couple and their children, being united by a sense of intimacy and love. It is clear this ideal no longer reflect real family life, where more people are in non-heterosexual relationships, more women participate in labor force and more children are born with assisted reproductive technology. Family laws and policies in Japan, however, are based on a model of nuclear-family consisted of a working father, a housewife mother and their biological children, and therefore disseminate the ideal image and encourage the practice of nuclear-family, making it hard for married couples to have separate family names and civil codes regarding the legal status of a child born after divorce to be revised.

We aim at constructing new models for family that can accommodate diverse practice of family life across the globe, by bringing together legal, institutional, historical, socio-cultural, medical, philosophical insights and conducting comparative studies of family life in different cultures. What makes our project unique among the previous studies of family is our focus on “love”—love in a couple, love in the family, love between parents and children, and love of children for their parents. Perhaps, the vital role of nuclear-family, organized around its ability to integrate sexuality, reproduction and nurturing of next generations under the banner of “love,” has come to an end. Nevertheless, it survives as a moral value in the name of “family bonds.” It is, therefore, an urgent task to make visible driving forces behind and discursive operations through which the idea of nuclear-family continues to survive.

5. 本年度の研究実施状況

初年度である 2022 年度には、9 回の例会を開催し、メンバー相互の対話をスタートさせるとともに、本研究の主題について、共通認識の土台づくりを試みた。例会にて取り上げられたテーマは、20 世紀西洋思想における反家族主義・反家父長制思想、中国の一人っ子政策の功罪、母子家庭扶助制度の歴史的変遷、家事労働をめぐるフェミニズム言説の再評価、皇族における「家族と愛」への社会学的アプローチ、生殖医療がもたらす家族観の変化とその限界、児童文学のなかの家族像、24 条改憲案に集約される戦後日本の反動的家族主義の本性……と多岐にわたる。また、例会の内 1 回は国際シンポジウムを兼ね、海外から招聘した研究者とともに、トラウマ（とりわけ、家庭内での性暴力）の経験と記憶をめぐる諸問題について検討した。例会が回を増すにつれて、メンバー相互の理解が確実に深まり、初年度としては充実した議論が交わされた。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-21 アンチオイディプスの半世紀 発表者 立木康介

2022-06-18 「一人っ子政策」の光と影～社会保障の観点からのアプローチ～ 発表者 沈恬恬 東京大学／学振 PD

2022-07-16 母子家庭扶助制度の歴史的変遷と「ケアの絆」論の可能性——「家族と愛」の呪いを解くために (1) 発表者 直野章子

2022-09-17 家事労働に賃金を～愛はどこへ行ったのか～ 発表者 中井亜佐子 一橋大学

2022-10-15 皇室の「家族と愛」 ニクラス・ルーマンを参照して 発表者 鈴木洋仁 東洋大学

2022-12-04 国際シンポジウム「記憶の存在論と歴史の地平 III」 Through a Glass Darkly: Recollecting, Representing, and Interpreting the Past 発表者 Janice HAAKEN ポートランド州立大学 (名誉教授) コメンテーター 直野章子 コメンテーター 花田里欧子 東京女子大学

2023-01-21 血の繋がりとは親になる意思 一生殖医療における家族と愛— 発表者 小門 穂 神戸薬科大学

2023-02-18 児童文学の中の家族像 —松谷みよ子『モモちゃんとアカネちゃん』に描かれた“離婚”について— 発表者 日高由貴 大阪城南女子短期大学

2023-03-18 母子世帯の母親は、なぜ「家族の自助努力」を要請されつづけているのか？——24 条改憲論と戦後日本の家族主義 発表者 若尾典子 佛教大学 (元)

7. 共同研究会に関連した公表実績

国際シンポジウム「記憶の存在論と歴史の地平 III」、2022-12-04

8. 研究班員

所内

立木康介、直野章子、酒井朋子、藤野志織、藤原辰史

学内

木下千花(大学院人間・環境学研究科)、丸山里美(大学院文学研究科)

学外

富山一郎(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、沈恬恬(東京大学大学院法学研究科)、中井亜佐子(一橋大学大学院 言語社会研究科)、楡井誠(東京大学大学院経済学研究科)、内田利広(龍谷大学文学部)、小川公代(上智大学外国語学部)、熊谷哲哉(近畿大学経営学部)、小門穂(神戸薬科大学薬学部)、鈴木洋仁(東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター)、長瀬正子(佛教大学社会福祉学部)、花田里欧子(東京女子大学現代教養学部)、日高由貴(大阪城南女子短期大学総合保育学科)、菅野優香(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)		5 (3)		1 (1)			30 (21)		9 (9)		
京大内 (人文研を除く) (内女性)		2 (2)					8 (8)				
国立大学 (内女性)		3 (2)					18 (12)				
公立大学 (内女性)											
私立大学 (内女性)		10 (6)					56 (38)				
大学共同利用機関法人 (内女性)											
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)											
民間機関 (内女性)											
外国機関 (内女性)											
その他 ※ (内女性)											
計	0 (13)	20 (13)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	112 (79)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	10		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載 論文数 (必須)	掲載 年月日(必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	人文學報	1	R4.6	記憶を擁護する―「あり得ない出来事」の記憶を追いながら	直野章子
2	人文學報	1	R4.6	記憶が現れる―森崎和江の聞き書きから―	富山一郎
3	人文學報	1	R4.6	トラウマ記憶とトラウマ経験のあいだ―精神分析的な外傷論のアップデートの試み	立木康介
4	日本労働研究雑誌	1	R5.4 (印刷中)	(書評) 石川経夫『所得と富』	楡井誠
5	現代思想	1	R4.12	なぜ蓮實重彦は、珈琲にたっぷりと砂糖を入れるのか？あるいは「世代」とは何か？―「学年概念」から考える	鈴木洋仁
6	東京女子大学心理臨床センター紀要	1	R5.4 (印刷中)	島尾マヤへの家族臨床的接近(4)―分節化/punctuation による循環と変化	花田里欧子
7	Guillaume Rousset (dir.), L' interruption de grossesse entre cultures et universalisme (単行本)	1	2022.11	JAPON : EVOLUTION JURIDIQUE TARDIVE FACE AU CHANGEMENT SOCIÉTAL	Minori Kokado, Haluna Kawashima
8	二宮周平編著『LGBTQ の家族形成支援～生殖補助医療・養子＆里親による』(信山社 (単行本))	1	R4.7	生殖補助医療の公的管理と子の出自を知る権利	小門穂
9	ユリイカ	3	R4.7, 9, 12	肉の空洞――フェミニスト映画批評の性器的展開のために；母娘と「うつす」こと――高橋洋の映画世界における女性性の考察；映画身体の進化	木下千花

				——三宅唱における接触をめぐって」『ユリイカ』2022年12月号	
10	文藝界	1	R4.9	イメージとしての妊娠 ——ジョン・フォードにおける僻地分娩の主題	木下千花
11	web ゲンロン	1	R5.2	(書評) ファンタジーの力——鷺谷花『姫とホモソーシャル』評	木下千花
12	西村明編『シリーズ戦争と社会5 変容する記憶と追悼』(岩波書店)(単行本)	1	R4.4	「原爆の絵」が拓く証言の場	直野章子
13	MFE= 多焦点拡張	1	R5.3	物語と声、怖さについて	日高由貴
14	歴史学研究	1	R4.6	沖縄戦を考える	富山一郎
15	朝鮮大学災難人文 学研究所編『境界 から見た災害の経 験』	1	2023.2	たまり場のために	富山一郎

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

2023年度には10回の例会をプログラムする予定であり、内1回は人文研アカデミーとの共催により「中国と日本の児童文学における家族像」をテーマとする国際シンポジウムとして開催する。客員教授を班長とする本共同研究には、3年の研究期間を延長させる余地がないため、成果のまとめ方や公表手段について、2023年度中から議論を進めていく。その一

環として、これまで研究班内で語られ、論じられてきた諸テーマの拡散を、いくつかの中核的問いの周りに整理し、相互の有機的連関を構築するとともに、各メンバーの研究のあいだに動的な連携が生じるように配慮したい。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

国際シンポジウム「中国と日本の児童文学における家族像」（仮）、2023-11-18 開催予定。